

すべての政治家と国民に問うく自民党総裁選にあたって

第一 すべての政治家に問うく「政党政治」の自殺が始まっている

経済危機が一段と深刻な様相を見せる中、政党政治が正念場に立たされている。日本の政権寿命はいよいよ短くなり、選挙による「国民の審判と政権選択」は、無残なほど破壊された。政党、政治家の「言葉の軽さ」と、政党政治の原理原則を無視した行動は、国民の手の届かないところで不毛な権力ゲームが行われているという国民の苛立ちと、深刻な「政党不信」を生みだしている。

一連の政治改革、行政改革の到達点として導入された「政治主導」は、いともたやすく「政治家主導」や「与党主導」に置き換えられ、政治の無責任体制に拍車をかけている。政策を実行する体制やリーダーシップを欠いたまま、責任の所在も定かではない言葉だけの「改革」や「対策」が飛びかい、それがさらに国民や市場の不信をもたらしめている。

このまま事態を放置すれば、「解決策があるのに実行できない」段階から、「解決策のない」段階へと向かいかねないにもかかわらず、政党、政治家には、国民生活を覆う諸課題と真正面から向き合う気力も見られない。それどころか、かつての棲み分け的な中選挙区制に郷愁を抱き、あるいは、安易な首相公選論に逃げ込もうとするさまは、まさに政党、政治家の「統治能力の危機」を物語るものである。

すべての政党、政治家は、いまや「政党そのものが国民から見放されつつある」という深刻な危機感に立って、何よりもまず、議会政治を使いこなす懸命の努力を行うべきである。それなしの制度いじりや政界再編は、「政党政治の自殺」以外の何ものでもないことを自覚すべきである。

第二 与党に問うく自民党新総裁は責任ある「政治主導」体制の確立を

これまで与党は、日本の政治が官僚主導体制と決別するシンボルとして選択した「政治主導」体制の運営にあまりにも無自覚であった。それが、政権から政策運営の求心力を奪い、「政治の自己消耗」を加速させてきた。内閣不信任案を否決しつつ、同時に首相交代を画策するさまは、党内事情が内閣に優先し、国民や選挙と切り離されたところで内輪の消耗戦を繰り返す戦後日本政治の体質を端的に示している。

与党の立場にあるすべての政党、政治家は、長年の政治改革、行政改革の上に構想された今般の「政治主導」は、選挙において示された国民の選択にもとづき、政策の責任ある実行にむけて「首相を中心とする内閣主導」体制の構築をめざすものであり、政治家が行政に個別介入する「政治家主導」や、内閣とは別個に与党が政策に関する発言を繰り返し、決定を左右しようとする「与党主導」とは、明らかに異なるものであることを、この際、はっきりと確認すべきである。

また、少なくとも自民党新総裁は、新政権の発足にあたっては、①政策の決定に関する「政府と与党の二重体制」を解消し、政府・与党の指導体制を内閣の下に一元化すること、②そのためにも、派閥順送り人事を排し、政策決定上必要と思われる与党幹部はすべて政府に入ること、③与党議員の行政との接触はすべて大臣、副大臣、政務官を介しておこない、官僚の側も与党機関や個々の議員と直接接触し、政府・与党間折衝に従事するこれまでの政治慣行を廃止するなど、「政と官の新たなルール」の確立を公約すべきである。

第三 野党に問うく参議院選挙にむけ「連立枠組み」の明確化を

自民党総裁選をめぐる報道が過熱する中で、野党の存在感はあまりにも薄い。今回の自民党総裁選は、与党側の「首相候補」が誕生することを意味しており、党員による予備選挙をおこなうなど、まがりなりにも、変わろうとする努力も始めている。

ところが、野党の側は、自民党総裁候補の中から政権枠組みの変更にかかわる発言が繰り返されているにもかかわらず、国民にたいし、どのような選択肢を提示しようとしているのか、いまなお、いっこうに見えてこない。

民主党をはじめ野党各党は、七月の参議院選挙が事実上、「政権選択」選挙に匹敵する意味合いを持ちつつあることを再認識し、自民党総裁選のタイミングをとらえ、「首相候補」と「政権政策」を含む、政権の「連立枠組み」をできうるかぎり早急に国民に示し、五月連休明け以降の国会論戦の中で与党との違いを明らかにすべきである。

第四 主権者国民に問うく政治を「傍観」する時代は終わった

政治をくさし、「傍観」していればよい時代は終わりを告げた。出口のない不況の中で行なわれる今回の自民党総裁選挙にあたり、わたしたち国民は、何よりもこのことを確認しなければならぬと思う。

わたしたちは、これまで、あまりにも政治に「臆病」だった。しかし、各界の責任ある立場の者は、政治に「臆病」であることを恥じ、言うべきことをはっきりと言わねばならない時期を迎えている。今日の政党に人材がいらないと思うのであれば、政治家の給源を広げるため、何をなすべきかについての真剣な検討も始めねばならない。

いま、行われている総裁選はほとんどの国民には関係のない自民党内の争いでしかない。わたしたち国民の順番は選挙である。選挙は、国民にその意思があれば、一夜にして政権を交代させることもできる「日常的な革命」の場にはかならない。わたしたち国民は、与野党双方に「政権選択」の条件整備を求めつつ、まずは、あと三ヶ月後に迫った参議院選挙で決着をつける覚悟を持ち、これから始まる数ヶ月を真剣に見守る責務がある。

平成十三年四月十九日

新しい日本をつくる国民会議（二十一世紀臨調）